

五無齋・保科百助先生の凄さと魅力

立科町教育相談員 岩上起美男

立科町出身の五無齋・保科百助先生は、胸中に「無垢なる教育的情熱」をたぎらせながら、ひたすら「人の子を賊はざる教育」を追い求める教師でした。

「人権文化の創始者」と評される保科百助先生は、「差別の愚なることを力説し、偽善を憎み、学識高く、人間礼讃に透徹した全生涯」（中山英一）を駆け抜けたのです。

長野市「保科塾」の塾生は、恩師・保科百助先生を次のように回想しています。「先生の教育方針は、進取敢為の気象（進んで物事に取り組み、反対や障壁に屈せず、最後までやり抜く気性）の養成であった。（中略）生徒から見た先生は実に人格高潔、識見卓絶、崇敬思慕の念やむにやまれぬものがあつた。」

他の塾生も、「全く野外教授といおうか、寺子屋式とでも申しましょうか、放縦そのままのようでしたが、私どもの頭には何となく懐かしく、また謹厳に感じられ、塾へ行くのが何よりも楽しみでありました。」と語っています。

直接、教えを受けた生徒にとって、保科百助先生は、まさに「無垢なる教育的情熱」の教師であり、厳格な規範意識を貫き、厳しくも生徒から慕われる高潔の師であったことがうかがわれます。

しかし、先生の人間的な凄さと魅力は、

決して「高潔な教育家」にとどまらなかったのです。

人道主義的な熱血漢教師が「保科百助」とするならば、「五無齋」というペンネームが象徴する奔放な奇行と毒舌、そして、その底にある強烈な反骨心や旺盛なユーモア精神、弱者に対する優しさ、寛大さこそ、今もなお先生が多くの人から敬愛されている所以ではないでしょうか。



このような、二つの名前が示す先生の魅力溢れる人間性は、「人間は振り子である。思い切りバカなことでできる奴は、思い切り真面目なこともできる。」と語ったタレント・ビートたけしと映画監督・北野武の関係に、どこか似ているのではないかと考えています。

おそらく両者の接点はほとんどないと

思います。しかし、ただ一点、振り子の振り幅がきわめて広く、振り子が二つの名前の間を大きく揺れ動きながら、その偉才を自在に発揮している点については酷似しているのではないのでしょうか。

映画監督・北野武は、ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞受賞をはじめ、カンヌやモスクワの国際映画祭などで非常に高い評価を得ています。その才能と実績から、東京芸術大学大学院映像研究科特別教授として迎えられているそうです。

さらに、作家や画家、音楽家としても、卓越した才能を発揮しています。

その半面において、ビートたけしの名前でお笑い芸人に徹して、時には世人のひんしゆくを買うような道化役を演じています。

振り子の振り幅が狭く、こぢんまりとした凡人は、このような振り幅の大きい振り子を有する人物に、不思議な魅力と羨望を覚える傾向があるようです。老生もその例にもれず、ビートたけしは、天赋の才能に恵まれた「鬼才」であり、自ら「鳥のように空を飛びたい」と望むのは勝手だけど、鳥が飛ぶために何万回翼を動かしているのか、よく見てごらんよ。」と語ったように、その才気を開花させるための苦労を惜しまぬ「努力の人」と考えています。